

「ヨハネによる序言(1)」

ヨハ1:1~5

1. はじめに

(1) 4つの福音書を並べ、時間順にメシアの生涯を追って行く。

① 前回は、ルカによる献呈の辞を取り上げた。

② 今回は、ヨハネによる序言を取り上げる(ヨハ1:1~18)。

* 時間的に最も早い。

(2) ヨハネの序言の3つの特徴

① 最も崇高なキリスト論である。

* これに匹敵する箇所は、新約聖書に2ヶ所しかない。

* コロ1:15~17

* ヘブ1:1~3

② 詩的文書である。

③ 神学的文書である。

* 神学校の1学期をかけて学ぶほどの内容である。

* 内容が豊富なので、3回に分けて解説する。

(3) 文書の構造

① 階段を一つずつ上るように、ゴールに向かっている。

② イエスの受肉がゴールである(14節)。

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」

2. アウトライン(1~5節)

(1) メシアの本質(1~2節)

(2) メシアによる創造の業(3節)

(3) 光と闇の戦い(4~5節)

3. メッセージのゴール

(1) ユダヤ人にとってのロゴス

(2) 共同体としての証し

(3) 復活後に書かれたことの意味

このメッセージは、ヨハネの序言からメシアについて学ぼうとするものである。

I. メシアの本質 (1~2節)

「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた」

1. 「初めに」

(1) ヨハネは、創世記1:1以前に遡って、そこからこの福音書を書き始める。

- ①マルコは、バプテスマのヨハネの活動から書き始める。
- ②マタイは、アブラハムの系図から書き始める。
- ③ルカは、献呈の辞から書き始める。
- ④ヨハネは、共観福音書の書き始めよりもさらに遡って、書き始める。

(2) 「初めに」という言葉は、キリスト教信仰の土台となる神学的概念を示している。

- ①ヨハネは、神しか存在していなかった時に、戻っている。
- ②キリスト教では、神以前には戻れない。
- ③異教の神話には、神々が造られる話が出てくる。

(3) 「初めに」存在したお方として、神ではなく、「ことば」を紹介している。

- ①驚くべきことである。
- ②では、「ことば」とは誰か。

2. 「ことば」

(1) ギリシア語の「ロゴス」である。

①ギリシア哲学では、ロゴスに2つの意味がある。

- *理性 (メシアは神のアイデア-理想的な形-である)
- *言葉 (メシアは神の表現である)

②しかし、ヨハネはギリシア哲学者ではなく、ユダヤ人の漁師である。

- *紀元1世紀のユダヤ教の用語をギリシア語に訳した。
- *ヨハネだけがメシアを示す言葉として「ロゴス」を使用している。
- *しかも、「序言」にしか出てこない。

(2) ヘブル語では「ダバール」である。

①旧約聖書では、「ダバール」が擬人法で用いられている。

②つまり、「ことば」が人格的存在であるかのように行動しているということ。

*創15:1、詩33:4~6、147:15、イザ9:8、55:10~11、エゼ1:3

③イザ55:10~11

「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる」

④ユダヤ教のラビたちは、アラム語で「メムラ」という概念を作り出した。

*これもまた、「ことば」という意味である。

*「メムラ」に関して、6つの基本的教えを確立した。

*「メムラ」は、神とは区別されるが神である。

⑤ヨハネは、「メムラ」を「ロゴス」と訳した。

*ここには、同時代のユダヤ人に対するメッセージがある。

*メシアは、「メムラ」である。

3. 「ことば」の3つの特徴

(1) 天地創造の前から、「ことば」は存在していた。

①「ことば」と神とは別の存在である。

(2) 「ことば」は、神と親密な交流関係にあった。

「ことばは神とともにあった」

①「ともに」(with) は、ギリシア語で「pros」である。

②この前置詞は、親密な交流関係を表している。

(3) 「ことば」は、神と一体であった。

「ことばは神であった」

①エホバの証人の解釈

*「ことば」の前に定冠詞が付いていないので、「a god」と訳す。

*この解釈は、イエスの神性の否定か、多神教に行き着く。

②正しい解釈は、「神」を形容詞と取ることである。

4. 1節の内容の再確認(2節)

「この方は、初めに神とともにおられた」

(1) ユダヤ人との論争で、この点が特に重要になる。

①ヨハ5:18

「このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである」

②ヨハ19:7

「ユダヤ人たちは彼に答えた。『私たちには律法があります。この人は自分を神の子としたのですから、律法によれば、死に当たります』」

II. メシアによる創造の業(3節)

「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない」

1. 創造物語が記されている。

(1) 「すべてのもの」

①神以外のすべてのもの

②天使も含む。

(2) 「この方によって」

①ギリシア語の前置詞「dia」

②英語で、「by Him」、あるいは、「through Him」である。

2. 「ことば」が神よりも劣るということではない。

(1) 神と同時に、創造の業に参加したということ。

III. 光と闇の戦い(4~5節)

「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった」

1. 「いのち」と「光」が関連付けられている。

(1) 「いのち」はギリシア語で「zoe」である。

①ヨハネの福音書で36回出てくる。

②メシアはいのちの源である。

*創造主として、肉体のいのちを与えてくださった。

*贖い主として、霊的いのちを与えてくださった。

*救い主として、永遠のいのちを与えてくださった。

2. 光とやみの戦いは、ヨハネの福音書のテーマのひとつである。

(1) 光が闇の世界に侵入し、輝いている。

①動詞は現在形。継続した動作。

(2) 「やみはこれに打ち勝たなかった」

「暗闇は光を理解しなかった」(新共同訳)

①動詞は、「カタランバノウ」である。

②光と闇の二元論ではないので、「理解しなかった」がよい。

③聖書は、闇にそれほどの力を認めていない。

結論：

1. ユダヤ人にとってのロゴス

(1) メムラは神とは別の存在であるが、神と同じお方でもある。

①1節は、メムラの1番目の特徴を表現している。

②ラビたちは、このパラドックスを説明しようとはしなかった。

③三位一体の教理によって、初めて説明可能となる。

④ここでは、唯一の神が複数の位格をもって存在していることが示されている。

(2) メムラは天地創造に参加されたお方である。

①3節は、メムラの2番目の特徴を表現している。

2. 共同体としての証し

(1) 14節

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」

①「私たち」という主語

②16節にも、「私たち」と出てくる。

(2) メシアの生涯の証しは、個人的なものではなく、信者の共同体が共有する。

①ヨハ21:24

「これらのことについてあかしした者、またこれらのことを書いた者は、その弟子である。そして、私たちは、彼のあかしが真実であることを、知っている」

3. 復活後に書かれたことの意味

(1) 光と闇の戦いは二元論の反映ではないが、それでも現実的なものである。

①ヨハネの福音書の中で、闇の力が最高潮に達するのは、ユダの裏切りの箇所。

②ヨハ13:30

「ユダは、パン切れを受けるとすぐ、外に出て行った。すでに夜であった」

③復活において、光が闇を追い出した。

(2) ヨハ20:19~20

「その日、すなわち週の初めの日の夕方のことであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。『平安があなたがたにあるように。』こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ」

(3) ヨハ3:16の重要性

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」

①神の愛の業は完了した。

②私たちが、その愛に応答する番である。